

Into my Packet



後藤滋樹の

## 新・社会楽

後藤滋樹  
goto@goto.info.waseda.ac.jp  
早稲田大学 理工学部 情報学科

## 第52回「英語ヒアリング上達法」

## 【英語は世界の共通語】

私が学生の頃には、エスペラントという世界共通語の活動があった。その理想は崇高だったと思うが、今になってみると事実上の世界共通語は英語である。インターネットの世界でも英語が圧倒的に多く使われている。私も毎日英語の電子メールを受け取っている。

## 【ヒアリングが重要な理由】

昔から、読み書きソロバンというくらいで、日本人は読み書きの能力を重視する。ところが英語はヒアリングが最も重要だと思う。ヒアリング能力が向上すれば文章を読む速度も速くなる。

英語と日本語では語順が違う。英語の文章を読むときに、単語を単位として日本語に翻訳すると単語の並び方が日英で違う。その状態で文章を理解するためには、英語の文章の上を何度か往復しながら読み進む。これでは速読にならない。

ヒアリングの能力が向上するということは、聞いた順番に理解できるということだ。文章を読む時にも一直線に進む。これが読書のスピードアップにつながる。

## 【反復学習では鍛練できない】

ヒアリング力を向上させるには、まず耳を慣らす必要がある。そこで英会話の録音テープ、CDなどを購入することになるのだが、私の経験では同じテープやCDを反復して聞いてもヒアリング力は向上しないと思う。

これには反論もありそうなので、私の考えている理由を書いておこう。ようするに、人間は学習能力があるためにテープやCDの内容を覚えてしまう。音楽のCDを聴く場合を考えてみるとよい。何度か反復して聴いたCDならば、曲の順序まで覚えてしまう。だから語彙を増やそうと思って単語を覚えるのならば反復練習がよい。しかしヒアリング力というのは、初めて聞いた時に理解できる能力なのだ。次はあの文章だと予測ができてしまうと、そのテープやCDには意味がなくなる。



## 【実践編・VOA】

結局のところ、右耳から英語を聞いて、左耳に抜けていくような状況を作る必要がある。私自身が活用したのは、短波放送である。今では短波の

国際放送はインターネットの上でも音声として提供されているので、クリックだけで済む放送もある。昔は受信するのが一苦労であった。

私が最も時間をかけて聴いたのはVOA、ボイスオブアメリカという米国の放送局である。プログラムの中には、今でも続いているスペシャルイングリッシュというものがあり、1400語の基本単語だけで(固有名詞は除く)ニュースや短い話をゆっくり話す。私の友人の英語達人は、スペシャルイングリッシュは不自然な英語だと喝破したが、入門者には貴重な番組であった。

短波放送は夏と冬では電波の状態が異なるため、周波数を変更することが多い。しばらく聴いていないと、どの周波数に合わせるべきかわからなくなってしまう。短波放送を聴くのがブームであった時期には、プログラムを掲載した雑誌が出回っていた。もちろん、直接に米国に問い合わせることもできた。

## 【VOA 訪問記】

観光客としてワシントンDCを訪れる人は、まずホワイトハウスの内部の見学ツアーに行くのではないだろうか。私は、ホワイトハウスの内部は見たことがないが、VOAの見学には行ったことがある。場所はスミソニアン博物館の近くでわかりやすい。

私がVOAを訪問したとき、ちょうど高校生の一団が見学中であった。アメリカでも修学旅行をするのだろうか。その中に1人だけ私に加わった形になり、案内の女性が質問をしてくる「なぜ、VOAを見学に来たのですか」。ここで私は一言「私はVOAで英語を勉強したのです。スタジオを見たいと思っていました」。この台詞が案内の人を感激させてしまった。結局、私は高校生の一団に「この日本の紳士はVOAで英語を勉強した方です」と紹介される羽目になった。

スペシャルイングリッシュの単語帳、番組の内容を本にしたもの、ボールペン、バッジ、詳細な周波数の表などのお土産をもらってVOAの見学を終えた私は、それ以後もVOAをよく聴き、知人・友人にもヒアリングの上達法として短波放送を勧めた。私はとても達人にはなれなかったが、昔の自分に比べれば格段の向上である。

私の経験は昔の話になってしまった。現在ではCNNも簡単に見ることができるようになった。今さら短波ラジオでもないようにも思うが、テレビでは「ながら族」にはなれない。また番組の内容もCNNはニュースが主体で、スペシャルイングリッシュの番組のような感じではない。だからヒアリング上達法として何を勧めるべきなのか、私は現在の決まり手を持っていない。



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)